

会報

善哉

令和4年4月1日 第54号



建て替えられた東光寺薬師堂（南矢名）
神奈川県指定重要文化財の木造薬師如来立像（鎌倉時代作）が安置されている

秦野歴史おこしの会

12年の歳月を経て 再び実を結んだ大イチョウ



まほら 秦野
みちしる べの会主 幸

武 勝美

月。六月、緑が濃くなった梢から聞こえるアオバズクの鳴き声。秋空にそびえる大山を背に輝く金色の尖塔。その金色が「ちひさき鳥の形して」散る初冬。そして、巨躯がそのたくましい素肌を見せる厳冬。

寺山に生まれ育ち、東中学校で仕事をさせてもらった私には、校庭に立つ大イチョウはいつも私の視界の中にあるのです。東中学校が開校して六十二年、学んだ七千を超える生徒が、朝夕眺めてきた樹齢二百有余年のこのイチョウは、東地区の住民の心のよりどころにもなっています。そのイチョウが、「子供たちの教育活動に支障をきたす邪魔な木、駄木」との声が一部関係者の中にあり、「伐採ありき」で議論されているとのこと。大きなことから、樹齢二百年だから価値があるのか」と問われれば、「二百年を生きた命だから価値がある」と私は言います。「文化的・歴史的な木ではない」という声には「開校以来子どもたちを見守り、またいつも子供たちの視界の中に在った木というだけでも価値がある」と応えます。

イチョウの現況維持が困難であることは理解できます。しかし「移植にかかる経費や移植が成功するかどうかも分からない、だから伐採」という論

には、私はどうしても組みせません。平成二十二年に秦野市を会場として全国植樹祭が行われます。秦野市民のエコロジ、地球温暖化への具体的行動としても、東中学校の大イチョウの生存を考えたいのです。

「教育は百年の大計」と言われます。イチョウを伐採するのも、校庭整備という中での「百年の大計」でしょう。でも、イチョウを生きさせる努力をするのも「教育の百年の大計」です。学校は命の大切さを学ぶところ、そして命を育むところです。樹齢二百年のイチョウの命を永らえさせることは学校教育のたいなる実践です。

二〇〇八年三月 武 勝美：

Kさんは地元自治会の総会でイチョウの存続を訴えてくれた。卒業生の一入Sさんは「移植は同級生の総意」との請願に校長室を訪れた。建設業を営むAさんからは「移植するならすべて私の手弁当でやらせて」と私に電話してきた。

こうして新しい地に根を下ろした東中の大イチョウは二〇二一年の秋、再び実を結んだ。幼稚園の正門に降る黄色の葉に園児たちは歓声を上げる。一つの命は確かに次代に引き継がれた。

(二〇二一年十一月・記)

二〇〇九年十二月九日、東中学校の校庭のイチョウの大樹が西門脇に移された。二〇二一年の秋、そのイチョウに「初めて銀杏がなったよ」とKさんから喜びの声が届いた。

新体育館建設に伴う校庭整備のため、校庭の隅に立つ大イチョウが伐採されるかもしれない、という噂が聞こえてきたのは二〇〇五年の春だった。それで、「イチョウの移植」を関係の諸機関、地域、教える子たちに次の文書で訴えた。：教育は百年の大計

柔らかな雨が若緑の芽を濡らす四

震生湖雑記

伊東 久

本誌五十二号に今泉上町生れの横溝さんが「震生湖・名称由来推察考」を詳しく寄せられ、震生湖を大いに学びました。小生隣村の渋沢生れ、記事をきっかけにいくつか思いつき二〜三記してみました。

一、〈親達の心配なんのその、泳ぎを習う〉

終戦直後は湖周辺も未整備、入水自殺者（年二〜三人）もあり子供は近づくなど言われていた。農家の子供達は小学校四〜五年から畑の草むしり等普通に通にさせられていた。夏休みになると親も午後三時頃まで昼寝、夕方近く畑に出て行った。この昼休み悪童たちは五〜六人連れだつて約四キロの山道づたいに震生湖へ。「震生湖・名称由来推察考」のとおり、湖面に立ち枯木が何本も太枝も横に何本も、三尺フンドシの俺たちは、最初湖面横に四〜五十メートル途中枯れ木につかまって休み、泳ぎを上達し、後に湖の長い方、縦にゆうゆうと泳げるようになっていった。フンドシを硬くしぼり首にぶら下げて渋沢に帰る頃は、フンドシよく乾き何

くわぬ顔で午後の作業に加わっていた。二、〈当時の平沢小原集落など〉

震災で南小学校の女の子が土に埋まって亡くなったり湖ができたりの小原地区、現在は研究所や大きな老人施設ができたりの小原地区ですが、人里離れた小集落路線バス等未開通、何人かの勤め人の方や旧制女学校の生徒さんは、小田急渋沢駅まで四キロぐらい朝晩通っていました。

渋沢下集落は通過点で、何人かの顔見知りも出来ました。中井町境集落の北側、秦野市平沢小原集落は昭和二十年代戸数三十戸程。ほとんど農家で、地区の東端道際に集乳所が有り、煙草や麦、搾乳しぼり牛を飼う等であり、中程より西に増珠院さんというお寺（今立派な寺院）、終戦直後は屋根と太柱だけの住職さんどころか震生湖帰りの子供達の遊び場の時もあった。寺院から更に西側南向段々畑の中に小さな観音堂があり、正月だったか初観音には渋沢の子供達もお参りしたものだ。露店が二軒ばかり毎年出ていました。観音堂の北の峰山道沿いに昔の焼場（火葬場）があり、近隣の伝染病で亡くなった人の火葬が行われていた（私の子供友達ともう一人焼かれたこと知っている）。震生湖への行来の手道沿い

で、悪童たちは側を通るとき鼻をつまんで礼をして通ったものです。

三、〈観光地となる〉

前記した湖面の突出した材木も除かれ、周りの道路もやや広く整い貸しボートも何艘か浮び、祝日等には近くの若者達が集うようになった。

その昔娘さんのロングスカートが流行した何年頃だったか、水際でスカートの裾が汚れないようにそれを男若者がひやかしたり、小生がカメラを覚え近所の娘さん二人ボート遊びを撮って、いい画面四ツ切に伸ばし、ある展覧会に出品したことを思い出しました。二人の娘さんは各々隣村へ嫁ぎ八十才になろうと元気である。

結婚といえ小原集落の豪農の娘さん震生湖で渋沢の青年と出会い嫁がれ、そのご主人は現在九十三才、大型トラクターで畑に出ていられる。小生の実家のすぐ近くの方で何十年もお世話になっています。渋沢青年団長、西秦野村青年団長、中郡西部同団長、秦野市農地理事はもちろん、神社・お寺の役員さん世の中の為に元気で尽くされ、ますますお元気、震生湖ゆかりのカップルです。令和三年五月記（二〇二三年は、震生湖生誕百年を迎えます。 編者）

ひよつくり芋は人生の味

横溝 彰

お客様を接待する席でのこと。先輩に連れられて、東京は人形町の料亭での初めての宴会であった。お客様と一通りの挨拶を済ませて席に着くと、私の前に運ばれてきた料理は、子どもの頃から見慣れたものであった。仲居さんは「衣被（きぬかつぎ）です」と言っ

て席を立った。周りを見ると、皆さんは手慣れた様子で口に運ばれている。私は思わず「なんだ、ひよつくり芋だよ！」と叫んでしまった。怪訝（けつぜん）そうなお客さんの顔が私の方に向けられた。

そこで、先輩は罰悪（ばつあく）そうに「こいつは田舎（いなか）もんで衣被（きぬ）を知らないから」と言っ



収穫間近の里芋畑

度と弟の世話は私の仕事。母と兄は野良仕事に精を出す毎日であった。貧乏暮（ひんぱんぼろ）して修学旅行の積立金（せきだてきん）が用意（ようい）できないことが度々（たびたび）。そんな時、母は「来月（らいげつ）にしてもらえ」「俺（おれ）はいやだ」のやりとり。母は「泥棒（どろぼう）をしる」と言っているんじゃない。一か月待つてくれとなぜ言えない。お前はそんな勇氣（ゆうき）もないのか」と言う。翌朝（あしたあさ）、玄関（げんかん）に里芋（さといも）が南京袋（なんきんぶくろ）に入れて用意（ようい）されていた。これで積立金（せきだてきん）を払（は）えということだった。私は登校（とうこう）の途中で里芋（さといも）を市場（いちば）において学校（がっこう）へ行き、放課後（ほうかご）に引き返（かえ）して代金（だい金）をもらって、

学校（がっこう）に戻（かえ）り支払い（しやひ）を済（お）ませた。勿論（もちろん）、先生（せんせい）は家計（かけい）が苦（くる）しいのは十分に理解（りかい）されているので、「無理（無理）するな。来月（らいげつ）でいいのだから」と言（い）ってくだ（くだ）さったが。学校（がっこう）から帰（かえ）ると卓袱台（しやくふだい）の上に市場（いちば）に出（で）せなかつた塩ゆ（しほゆ）での小（こ）さな里芋（さといも）が皿（わ）に盛（も）られて新聞紙（しんぶんし）をかけて置（お）いてあつた。母（はは）が仕事（しごと）の合間（あひだ）に里芋（さといも）を釜（かま）でゆで上（あ）げたもので、これ（これ）がおやつ（おやつ）であつた。私（わたし）の家（うち）やまわりでは、この芋（いも）のこ（こ）を「ひよつくり芋（いも）」と言（い）っていた。指（さ）で芋（いも）の皮（かわ）をす（す）つと押（お）すと、つるつと中身（なかみ）がでてきて醬油（しょうゆ）を少（すこ）しつけて口（くち）に運（は）んだものだ。その後（そののち）、高校（こうこう）を出（で）た兄（あに）は大学進（だいがくしん）学（がく）を諦（あきら）め銀行（ぎんぎん）に就職（しゅうしょく）。私（わたし）は兄（あに）の後押（のちおし）しもあり大学（だいがく）に行（い）かせてもら（もら）った。大学（だいがく）の入学式（にゅうがくしき）では、銀行（ぎんぎん）を休（やす）んだ兄（あに）が、私（わたし）の隣（となり）で涙（なみだ）を流（なが）しながら一（いっ）緒（しょ）に校歌（がうか）を歌（う）ってくれた。

衣被（きぬ）がひよつくり芋（いも）のことだと驚（おどろ）いた私（わたし）は、宴席（げきせき）で促（うなが）されて、先輩（せんぱい）に止（とど）められたが、ひよつくり芋（いも）にまつわる話（はなし）を披露（ひりやう）した。お客（きやく）さんは大（お）変（へん）感（かん）心（しん）されてもつと聞（き）きたいと言（い）われたが、その日はそ（そ）こで止（とど）めた。後（のち）日（ひ）、お客（きやく）さんの重役（じゅうやく）の方（かた）から私（わたし）に電話（でんわ）があり、あなたと二人（ふたり）で食（た）事を（し）しよう（と）誘（よ）うと誘（よ）うてくだ（くだ）さつた。その重役（じゅうやく）の方（かた）は大学（だいがく）の先輩（せんぱい）でもあつた。「君（きみ）のひよつくり芋（いも）の話（はなし）を聞（き）



里芋の収穫



ひよつくり芋

で感激した。仕事を一生懸命やってくれているから、仕事は増やすようにする。自信をもって営業をしなさい」と励まされた。

その後、転勤先の広島で家族ともども十八年を過ごすこととなったが、秦野の母から手紙の入った宅配便が何回も届いた。折り込みチラシの裏面に鉛筆で書かれた文面はほとんど同じで「自分のほうは健康で問題ない。お前のほうは大丈夫か。子どもたちは、ぐれていないか。そして仕事で他人に迷惑をかけていないか？」こんなくんだり

であつた。荷物の中身はいつもの母の手になる泥のついた里芋と煎った落花生であつた。里芋の中にはひよつくり芋にしてもいいような小さなものも入っていた。私の話を何度も聞かされていた妻は「ひよつくり芋よ」と言っていた。子どもたちに食べさせていた。母の里芋は仲間に差し上げると美味しいと言われ、こんどいつ届くのかと催促されることもあつた。四十歳で寡婦となつた母は、化粧品一つ買うことなく、年老いて自慢の黒髪は白髪に変わったものの、行商のおばさんから買った椿油で

髪を整えていた。当時の母のことを詠んだ俳句が秦野の市民文芸に入選した。「黒揚羽 椿油の 母米寿」。九十二歳で亡くなるまで古里の畑を耕して私たちを気遣ってくれた母は、私にとって密やかな誇りであつた。

母が亡くなって間もなく十三年になる。故郷に戻った今、母の耕していた畑は、兄も亡くなり人に貸して家庭菜園となっているが、借主は「昔、お母さんから教えてもらった」と言つて、見事な里芋を作られている。私も裏庭で里芋を作り、「秦野のひよつくり芋」を「人形町の衣被」とだぶらせて味わいながら、様々な皆さんにお世話になつた「人生の味」を噛みしめている。

「ひよつくり芋」については、筆者が書かれているように、里芋の小芋を塩ゆでしたもののことであり、秦野地方の方言のようなものかと思つていました。

ところがある日、海老名出身の方に「ひよつくり芋」の話をすると、海老名周辺でも「ひよつくり芋」と呼んでいるとお話をされました。詳細はわかりませんが、どうも、この呼び方は、神奈川県の中央地域に広がっているようです。（編者）

二人のトツコンさん

浄土宗桂林寺 住職

竹内 光仁

秦野市のホームページを覗いてみると、信仰について書かれた中に徳本上人という方が記載されています。そこには徳本上人の唱える念仏が江戸で大評判になったこと、秦野にも訪れたこと、「トツコンさん」と呼ばれ虫よけの念仏として広く行われていたこと、千村の泉蔵寺に座像があること、が書かれています。また、泉蔵寺のホームページを見てみると座像についての説明書きがあり、安産を祈ってお念仏が唱えられたこと、漢方医学に詳しく病



石造徳本上人座像（泉蔵寺・市内千村）

気を治し、甲斐・駿河・相模へと行脚され泉蔵寺にも滞在されたこと、が書かれています。しかし、徳本上人について調べていくうちに色々と齟齬があることに気づきました。

まず、江戸で「流行神」とまで呼ばれ熱狂的に支持をされた徳本上人の足跡を調べてみると、宝暦八年（一七五八）紀伊国日高郡に生まれ、苦行を行いつつ各地を巡り人々にお念仏を授け、平塚にも滞在し三万人もの信者を集めたという記録はあるものの、秦野に滞在をしたという記録を見つけることは出来ません。また、医学に精通していたという記録もみつけることはできません。昔からの言い伝えが事実と異なることはままあることなので、秦野に立ち寄っていないことを残念に思っていたところ、もう一人の徳本上人の存在に行き着きます。それは「甲斐の徳本」と呼ばれた永田徳本上人です。

永田徳本上人は永正十年（一五二二）三河大浜に生まれ（※異説あり）、仏門に入り修験道を学びつつ漢方医学を修め、信濃・甲斐から東海・関東諸国を巡り貧しい人々に無料で薬を与え診療を行い「医聖」と称された人物です。現代でもその功績は称えられ、湿布薬などを製造する会社の社名「トクホン」の由来となっています。おそらくこちらの徳本上人が秦野に立ち寄り施術をしたという事実と、前述の徳本上人の存在とが混ざり合い、現代に伝えられていると考えられます。

お二人が生きた時代には二百年ほどの隔たりがありますが、今のようにならばマホを開けば簡単に情報を得られる時代と違って、当時は旅人の話を聞くことで外部の情報を得て、起こったことを口伝えで残してきたことでしょう。江戸時代の人々はお二人を並び称してこう言ったそうです。

「徳本は甲斐の名医に紀の行者」
命を救ってくださる徳本上人と、後生を救ってくださる徳本上人。秦野も現代に至るまで二人の「トツコンさん」によって支え護られてきたのです。



名号塔（泉秋寺・市内堀川）

禅の歴史と精神 (第二回)

愚閑道場 愚閑勝裕 (瀬戸川勝裕)

第二 中国の禅の歴史

一 初期の中国の禅宗

慧可は達磨大師から法を受け継ぎ二祖となり、鑑智僧璨(かんちそうさん)を三代目の法嗣とし、鑑智僧璨は生涯人を避けて世に隠れて修行し、「至道は無難(ぶなん)なり、唯だ揀択(けんじやく)を嫌う」ではじまり「信人不二、不二信人、言語道断、去(こ)来(らい)・今(こん)に非ず」という句で終わる「信人銘(しんじんめい)」を著しました。

次いで大医道信(だいいどうしん)が法を嗣ぎ四祖となり、この四祖道信のもとから大満弘忍(だいまんぐにん)と牛頭法融(ごずほうゆう)の二人が現れたのです。

その後中国禅の主流となるのは弘忍の法系であるが、牛頭禅も唐の末ごろまで栄えました。唐の詩人の白樂天が師事した鳥窠道林(ちようかどうりん)がいます。白樂天が仏教の真髄は何かと問うと、「諸惡莫作(しよあくまくさ)、修善奉行(しゅぜんぶぎよう)」と応え、樂天がそんなことは分かっていると応

えたが「三歳の子供がこれ識るといっても八十の老翁もなを行い難し」と応じたという。この鳥窠は牛頭禅の法系である。我が国の伝教大師最澄が入唐し修したのはこの派の禅でした。

二 中国禅の大成者六祖大鑑慧能(だいかんえのう)の出現

慧能の伝記によりますと、達磨大師が亡くなってから百年後ぐらいに生まれ、出家前は生活のため薪を売っていました。たまたま「応無所住(おうむしよじゆう)、而生是心(にしようごしん)」(応(まさ)に住する所無くして、而も其の心を生ず)「つまり本来の心というものは留まるところがない。その執着することのないのが本当の心だ」という金剛經の一節を耳にしました。慧能は字が読めなくても理解できたようです。瞬時に悟ったのです。そして五祖弘忍の門戸を叩いたのです。そのとき両者の挨拶はまさに禅問答でした。弘忍・おまえはどこから何をしに来た。

慧能・私は嶺南から来た百姓です。ただ法を求めてきただけです。弘忍・おまえのような山猿に法などわかるものか。

慧能・人に南北ありと雖も仏性には本より南北なし。獼猴(獣のこと)の

身は和尚と同じからざるも、仏性は何の差別か有らん。

慧能は、米つき部屋に住まわれ米つきの仕事をさせられ、弘忍の指導は受けられませんでした。弘忍は数百の門下から六祖を選ぼうと考え、門下に自分の心境を述べた偈をつくることを命じたのです。上座にいた神秀(しんじゆう)は、

身是菩提(身は是れ菩提樹)

心如明鏡台(心は明鏡台の如し)

時時勤拭拭(時時に勤めて拭拭し)

莫使惹塵埃(塵埃(じんあい)を惹(ひ)

かしむることなかれ)

(誰でも体はブツダと同じであり、心もブツダと同じく美しい鏡のようなものである。だから鏡にほこりがつかないように心掛けて身体や心修行を怠ったり、煩惱の心を起こしてはならない。) 慧能は、これを聞いて「これはおかしいぞ」そばにいた僧に書いてくださいと頼み

菩提本無樹(菩提本樹なし)

明鏡亦非台(明鏡また台にあらず)

本来無一物(本来無一物)

何処惹塵埃(いずれのところにか塵埃を惹かん)

(悟りというものは、もともと樹という形があるものではない。もともと何

もないのだから、どこにホコリがつくというのだ。」

これは、達磨大師が梁の武帝に「廓然無聖」「識らず」と応えたのと同じでカラーンとして何もないのだから、ホコリなどつきようもない。神秀より格段上のものであり、弘忍は、慧能こそ法を嗣ぐ者と確信しましたが、慧能は他の者から迫害を受けるのを恐れ、弟子たちの前では神秀の偈を讃え、慧能の偈を「悪魔の偈」として批判したのですが、その夜密かに慧能を呼び「袈裟」を与え、五年間身を隠すように言い寺から逃がしたのです。

その後慧能は、五年間の潜伏生活の後、広州・法性寺（ほっしょうじ）にて剃髪し、四十歳の頃正式に出家し、翌年韶州（しょうしゅう）に法林寺を建立し布教活動を行い、優秀な弟子を育成しました。一方、神秀は北方に留まり禅を広めました。ここに禅宗は慧能を中心とする南宗禅と神秀を中心とする北宗禅の二派に分かれたのです。

★新入会員です よろしく

三國 登美江 伊勢原市

片野 勝 北地区

栗原 泰二 北地区

秀 俊明 西地区

（続く）

岩田 操 西地区
寺門 朋子 大根地区

★総会について

一月二十九日（土）に予定していた、秦野歴史おこしの会臨時総会及び特定非営利活動法人設立総会は、新型コロナウイルスオミクロン株感染拡大に対処して、会場を秦野商工会議所から菩提上会館に移し、理事、監事、会計担当者合わせて十二名により開催いたしました。会員の皆様とともに開催できなかったことが、非常に残念でなりませんでした。

出席できなかった会員の方には電話にて、議案の賛否について確認しましたところ、皆様賛成してくださいました。また、議案審議についても議長に一任していただくことを了承してください、すべての議事・議案について承認をいただくことができました。

後日会員の皆様には結果をご報告させていただきます。（理事長 小泉 孝）

訃報

当会第三代理事長（平成十六年（二十四年）の杉崎正二様が、令和三年十二月に御逝去されました。謹んで、御冥福をお祈り申し上げます。

◆表紙の題字

「善哉（よいか・よきかな）」
揮毫 蓑毛山寶蓮寺

三十三世住職 東島光明師

『寶蓮寺真名縁起』によれば、聖武天皇の命を受けた行基と良弁が、伊勢の皇大神宮に赴き大仏造立の願いが叶った時、歓喜して舞い、歌い、言ったことばが「善哉、善哉、時哉、時哉」である。・・会報第三号から要約



令和3年8月19日、当会から、金剛寺（東田原）へ、ベンチを寄贈しました。

「善哉」への投稿依頼

旅先で出会った文化財の思い出、独自の研究成果などがありましたら、お気軽にご投稿ください。

事務局

秦野市羽根七〇七 小泉 孝 宅
電話 〇四六三―七五―〇〇六七